



Title	VIVANTと烈士之碑とCOP28：大阪大学最終講義にかえて
Author(s)	芝山, 豊
Citation	モンゴル研究. 2024, 33, p. 2-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102409
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《講義録》

VIVANTと烈士之碑とCOP28

大阪大学最終講義にかえて

芝山 豊

0 「生涯の経歴」

これからお話するのは、2023年7月16日から9月17日まで、TBS系「日曜劇場」枠で放送されたテレビドラマ『VIVANT』と、1938年6月に大阪上本町の大阪外国語学校の正門脇に建立され、いまは、北大阪急行箕面船場阪大前駅に隣接する大阪大学箕面キャンパスの目立たぬ場所に安置されている烈士之碑と、2023年11月30日から12月13日までドバイで開かれたCOP28がどうつながり、それが、わたしたちにどんな意味をもっているのかという三題嘶です。

興味をもって聞いていただけるようにするつもりですが、目に、心に、痛い話もしなくてはなりません。

「真実は目に痛い」(Правда глаза колет) というロシア語の言い回しを覚えたのは、『モンゴル研究』創刊に関わる少し前、十代の終わり頃でした。そこから半世紀以上を経て、体力、知力ともに実年齢以上に衰え、「従心所欲不躊躇」と、挨拶程度のものは除き、学術会議への参加、論文執筆などへのお誘いは固辞してきました。ところが、2023年の夏、話題のTVドラマを見ていて、画面に向かって、「あ、あかん！」と思わず大きな声をあげてしまいました。「目に痛いもの」を見てしまったのです。

誰かがきっと声をあげてくれるだろうと思いましたが、本格的な批評を目にする機会のないまま、ドラマの放送終了から暫く時が経ち、COP28の結末を知るに及んで、「またか・・」という無力感に圧し拉がれたのです。

見えてしまったものを見なかったことにすると、沈黙するとか、そんなことができるのかという煩悶の日々が続き、やっと、今日、奮闘を奮って、「見えてしまったもの」について若い世代の方々へ伝えることにしました。

自己紹介部分のタイトルに選んだ「生涯の経歴」ということばは、出身学校の大先輩である作家司馬遼太郎さんが、「モンゴル語を選んだことが、大きかったです？」という質問への答えとして使った言葉です¹⁾。

「生涯の経歴になりましたね。」という司馬さんの答えには、口には出さないけれども、「よくもわるくも」という修飾部分が隠れているように、わたしには思えます。

実のところ、司馬さんは、学徒動員の前、モンゴル語をほんの短い時間学んだだけで、モンゴル語

1) 司馬さんとモンゴルについては、拙論「司馬さんのモンゴル」(『モンゴル研究』No.18 2000年)と「司馬遼太郎のモンゴルとモンゴルの司馬遼太郎」(『清泉女学院大学人間学部紀要』第6号 2009年)を参照されたい。

に自信があったわけではありません。そもそも外語への入学も、帝大への道に失敗しての一種の不本意入学であったわけで、入学当時、学内を覆っていた特殊な雰囲気に完全には馴染めていなかったはずです。司馬さんにとって、大阪外語の蒙古語出身であることが、履歴上の汚点みたいに思えたこと也有ったと思います。実際、司馬さんには、そのことに触れない時期がありました。

学歴を問われて、「京大文学部に学んだ」と言えばそれだけですむところが、大阪外語蒙古語出身というと、すぐに「どうして、モンゴル語を?」といった類の面倒な質問が続くことになります。今の人なら、「学歴ロンダリングして、記憶や記録から抹消してしまえばよいのに」と思うかも知れません。しかし、ことはそんな単純なものではないのです。モンゴルを学んでしまうと、何かに出会う度に、「これって、モンゴル語で言うとどうなるのかな」とか、「これをモンゴル人の立場から見るとどうなるのか」と、ついつい考えてしまう癖がついてしまうからです。そうすると、日本語や漢文、英語やメジャーな西洋語だけから考えていると、まず、見てこないものが、いやでも見えてしまいます。

『世界史の誕生』で知られる歴史学者、岡田英弘さんは「司馬遼太郎はモンゴル通か?」という文章の中で、司馬さんの知識の限界について語っています。確かに、司馬さんは岡田さんと同じような学者ではありませんでしたが、勝手に自分をモンゴル通だと思い込む人々へいちいち説明はしなかったものの、自ら学者面したり、ましてや、モンゴリストであると公言したりはしていません。まあ、昭和男性に共通する mansplaining 的傾向がないとは言えないでしょうが、新説を掲げて学界に挑戦しようというような意気込みはもっていなかったはずです。ただ、モンゴルを通して、世界と自分たちのことを見る癖が、新聞記者や作家としての人格形成、世界観にまで、嫌でも関わってしまったことは自覚的でした。司馬さんのモンゴル観は時代によって大きく変化し、その変化は作品にも反映されてきました。モンゴルを学んだことは、青春の思い出や履歴の一齣ではなく、まさしく、作家としての「生涯の」経験だと言わざるを得なかったのです。

勿論、これはモンゴル語に限ったことではありません。それがどんな言語であれ、その言語の文化、その言語で考え暮らしている人々とその歴史に真剣に関わってしまうと、きっとそうなるのだと思います。ただ、後述するように、近代の日本人にとって、モンゴルは、とりわけ特別なものなのです。

斯く言うわたしもモンゴルを学んだことを生涯の経験としてしまった一人です。

「たたかう言語学者」などとも称される田中克彦さんは「研究は外交ではない」という意味のことを言っています。確かに、職業的外国研究者は外交と無縁ではいられない存在です。ここで言う外交は、社交的辞令だけでなく、利害関係を孕む忖度や自己規制などと言い換えられるかもしれません。田中さん自身、中国での学会で内モンゴルへの言及を避けるように言われて、内容を他の国の歴史に仮託して切り抜けたということを書かれていますし、モンゴル人民共和国時代、田中さんの講義の雑談の中で、「このことを書くと、二度とモンゴルには入国できないからね」と洩らされたのを聞いた記憶があります。

幸い、わたしには、生業としての縛りがなかった分だけ、また、身分や、社会的影響力がない分だけ、ある程度、自由に、「日本人が知りたくないこと」、「モンゴルの人が聞きたくないこと」を言ったり、書いたりすることができました。勿論、それも、あくまで「ある程度」であって、わたしのような社会的影響力のない人間にも、配慮は必要です。「外交」は、自分の身や立場を守るということだけではありません。モンゴリストとして発言、行動する場合、中華人民共和国内やロシアで活動している、民族活動家、人権活動家、宗教関係者らは勿論ですが、「民主化」後のモンゴル国内でも、体制や大国の方

針に抗い活動している市民活動家、環境保護活動家など、友人あれ、善意の情報提供者あれ、面識のない人物であっても、自分の不用意な言動によって、それらの人々を危険に陥れ、不利な立場に追い込む可能性があることを配慮し、慎重に行動せねばなりません。以下のお話にもそうした配慮が働いていると思って下さい。

なお、話の中で「さん」と呼ぶ方々には、本来、「先生」と呼ぶべき方々がおられるわけですが、「先生」というと、制度や学流上の師弟関係と誤解されてしまう恐れがありますので、一度でもお目にかかったことのある方は、恩師や後輩も含め、「さん」とお呼びします。公人や著名人、歴史的人物には敬称はつけず、面識の全くない方の場合、「さん」づけはかえって馴れ馴れしく不快と思われるといけないので、肩書等を適宜つけることにします。

1 『VIVANT』 ホワイトウォッキング オリエンタリズム

前置きが長くなってしましましたが、ここから、最初のお題、TBS系『日曜劇場』で2023年7月から放送されたドラマ『VIVANT』についてです。

以下、いわゆる「ネタバレ注意」の内容を含んでいます。そして、念のため、申し添えますが、文学研究の立場から見れば、すべての作品、広義のテクストは常に読者に開かれているものであり、唯一の「正しい読み方」というものがあるわけではありません。これからお話しするのは、当該のテクストをこう読むことが可能だということであって、こう読まなければならないということを主張しているわけではありません。

TBS系『日曜劇場』と言えば、昭和世代にも懐かしい、民放最長寿番組のひとつです。1950年代後半に『東芝日曜劇場』として誕生し、70年近い歴史をもつTBS系の看板番組であり、多くのヒット作品を生み出していました。リアルタイムの放送でのTV離れが進む中で、平成時代の日本のテレビドラマ最高視聴率42.2%という栄光の再来を夢見て作られたのが『VIVANT』です。

まず、思わずぶりなタイトルの説明から始めましょう。

VIVANT という綴りを、制作側としては、ラテン語読みではなく、語末綴りのTを発音しないフランス語風に発音してほしいようで、「ヴィヴアン」とカナ表記されています。

放送前、ドラマの内容はほとんど明かされず、この横文字のタイトルとメインキャストだけが発表されていました。実は、最初、わたしもこのタイトルにひかれて、所謂、teaser、「じらし広告」に誘導された一人です。

やがて、「じらし」に名指しされていないものの、明らかにモンゴルだと分かる風景が登場しました。『ナショナル ジオグラフィック』誌に登場するようなモンゴルの景色に、日本人気俳優を配するとなれば、長年、日本人のモンゴル観を論じてきた者としては、チェックしておかなければいかないと、番組を真面目に見始めたわけです。まさに、「生涯の経歴」のなせるわざですね。

さて、物語は、ある日本商社の多額の電子誤送金に始まり、中央ユーラシアの架空の国「バラカ」を舞台に展開します。モンゴル国の西に隣接するという設定の架空の国では、広義のモンゴル語のハルハ方言をベースとした現在のモンゴル国の国語（「国家公用語」）が使われていることになっていま

す²⁾。

VIVANT という単語はモンゴル語の語彙にはありませんから、物語の冒頭では謎のままで。物語が少し動き始めて、VIVANT は、陸上自衛隊の「別班」、すなはち、陸上自衛隊幕僚監部運用支援・情報部別班 BEPPAN、のことだと明かされます。

別班は、石井暁著『自衛隊の闇組織』(講談社現代新書 2018年)で一般にも知られるようになった組織です。いまもって、政府、防衛省がその存在を公式に認めようとしない、国民に馴染みのない組織。この大日本帝国陸軍中野学校の流れを汲み、国内外でスパイ活動を行う「別班」のメンバーが、モンゴル語話者たちの世界と深く関わる中で、敵に偽装の正体を見破られ、彼の行動をモニターしていた公安当局に対し、モンゴル語での会話の中の正体を諭すためにでっちあげた類音語が VIVANT なのです。別班員が公安を誤魔化そうとしているわけですから、実際にモンゴル人が「べっぬん」をキリル文字で書いて、VIVANT「ヴィヴァン」と発音するか否か(多分、しませんが・・)は関係ありません。音響音声学的な議論には興味がないので省きますが、主人公が「モンゴル語で言うと俺は VIVANT だ!」という脅しを吐くのは前述の設定上からやや無理がある気がします。

キリル表記云々はこじつけて、死んだはずの誰かが生きているという重要な要素を暗示することは欲しくて、「生きている」という意味の形容詞、名詞で「生者」とか、「生存中」という意味のフランス語が選ばれたのかも知れません。このタイトルは、漢字表記の「別班」の喚起する悍ましさを和らげつつ、伏線回収型の視聴者を引き付ける仕掛けの一環なのだと思います。

原作・演出を手掛けた福澤克雄監督は、放送前、作品への意気込みを、WEB サイトで、つぎのようにコメントしています。

「たまたまラジオから流れてきたある話が非常に興味深く、本作を企画しました。普段はモデルとなる映画やドラマを想定するのですが、本作『VIVANT』はどんなドラマにも当てはまらない、日本ではあまり見たことのないドラマになると思っています。正直怖さもありますが、自分自身も冒險をしている感覚でチャレンジしたいと思っています。誰が敵で誰が味方なのか、視聴者の予想を次々と裏切っていくエンターテイメントをお届けいたしますので、ぜひご覧いただければうれしいです。」³⁾

「日本ではあまり見たことのないドラマになる」とありますから、意地悪く言えば、日本以外ではまま見られるドラマだという表明とも言えますが、欧米並みのものを作れることを見せてやるという意気込みでしょう。実際、福澤監督は、公開後のインタビューの中で「海外ドラマ的な作りを試してみたかった」と発言しています⁴⁾。

一般論として、日本であろうと、アメリカやヨーロッパであろうと、物語にそれほど斬新なものはありません。The Thirty Six Dramatic Situations というような類のものがよく知られていますが、完全に新奇な物語を考えることは困難です。洋の東西を問わず、どんなドラマも、基本的には、これま

2) モンゴルについて多少の知識をもつものには、バルガという架空の国名は、実在のバルガを連想させるだろう。試みに、複数の日本人とモンゴル人に聞いてみたが、皆それを思い浮かべたと答えている。もし、意図的にバルガとの連想を狙ったものだとすれば、拙論「村上春樹とモンゴル—もうひとつのオリエンタリズム」(『モンゴル研究』No.17 モンゴル研究会 1998 年)で言及した、榎本武揚から村上春樹まで延々とコピーされ続けてきたブリヤートやバルガに対する日本人の偏見を上書きしたことになる。

3) https://www.tbs.co.jp/VIVANT_tbs/about/ (最終確認 2024年3月13日)

4) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年) 311頁。

で人類が継承してきた物語素やプロットの組み合わせでできています。ですから、かつて誰もみたことのないドラマを作ることは誰にも困難ですし、もし完全に未知の物語素や神話素が未知のプロットで提示されたら、観る人は理解できないし、面白がることも難しいはずです。

制作者は、日本型のドラマではこれまでなかったような設定と作り方を考えていたのですから、日本での放送が「好評」を博した後、海外への配信が日本での放送ほどの成功を収めていないという事実は特に驚くことではないでしょう。

知られざる非合法組織があつて、その悪の組織は、実は既存の体制の歪みの中に潜む悪人や悪の組織と戦っているといった設定は、陰謀論好きの多いアメリカのドラマには頻繁に登場しますし、善と悪の戦いに、出生の秘密、親子の愛憎、葛藤が絡むといった『スター・ウォーズ』風の古典的設定は、掃いて捨てるほどあります。

例えば、日本でもCSで放送されていたNBCの『ブラックリスト』(The Blacklist)はまさにそのような設定のドラマです。カンヌ国際映画祭主演男優賞受賞者のジェームズ・スペイダーが主演し、2013年から2023年まで続きました。多くの裏切りを経験したスペイダー演ずる元米海軍情報部エージェントを主人公とし、幼少期の曖昧な記憶と出生の秘密を抱える新人FBI女性エージェント、CIA、NSA、モサド、MI6、元KGB、マフィアや中華系組織まで入り乱れてのクライム・アクション・サスペンスです。舞台は主に米国内ですが、時として海外にも及びます。あまりに長く続いたので、出来にはかなり斑がありますが、ディラン・トマスの詩の一節を引用して主人公の最期を飾った長い物語の中には、『VIVANT』で使われていた要素のほぼすべてが入っていると言ってもよいように思います。(ちなみに『VIVANT』ではラストに続編をおわす『書經』の一節が引用されます。)

こうした例を考えれば、「日本ではあまり見たことのないドラマ」になる部分は、米国TVドラマ的な登場人物や諜報機関や国際的陰謀が、「日本人を主人公にして日本とつながる社会背景で展開する」新味にあるのでしょうか。

一部メディアが「視聴率や無料配信の再生数、SNSの反応などで、社会現象となった」と持ち上げるほど、『VIVANT』が日本で広く見られたのかどうかわかりません。(わたしの周囲のモンゴル関係者には全編通して観た人は意外なほど少なかった。)恐らく、『VIVANT』の視聴ターゲットは、海外ドラマを字幕やオリジナル音声で見たいというタイプの視聴者というより、平成のサラリーマンの鬱屈を『水戸黄門』的な勧善懲惡物語の枠組みで解消してくれた福澤克雄監督と、堺雅人、阿部寛らお馴染みのスターのコラボレーションを、海外ロケ豪華版『半沢直樹』スパイ・バージョンとして喜んでくれそうな人たちだったのではないかと想像します。

日本でのTV放送開始と同時に生まれ、TVとともに生きてきた最も古い世代として、TVドラマの復活を応援したいですし、そのエンターテインメント性、演技や、音楽、楽しませ方の仕掛けの巧拙等にいちいち文句を言うつもりはありません。とは言え、2020年代に、中央ユーラシアの諸民族の文化を扱う物語を、世界の一般視聴者に向けて、日本から発信するスケールの大きなドラマ作りを試してみたかったならば、時代遅れの1950、60年代ハリウッド映画的な作品づくりではなく、21世紀のグローバル・スタンダードの制作姿勢が求められるはずです。

配慮すべきことを敢えて英語で示すと、まず、排除すべきものとして、sexism, racism, whitewashing, cultural appropriation, ethnocentrism, orientalismなど、必要なものとして、inclusion, religious literacy, ecology, animal welfareなどが考えられるでしょう。

残念ながら、これらに十分に配慮されていて、全く文句の付けようもない、という類の作品は、世界中にまだそれほど多くないと思います。

例えば、2014年から2016年までNetflixで配信され、日本でも見ることができた『マルコ・ポーロ(Marco Polo)』もモンゴルを舞台にしていました。カザフスタンにロケして作られたこのTV映画は、me too運動で悪行が世界中に知れ渡ったハーヴェイ・ワインスタインが製作したもので、過剰な性的描写もセールスポイントだったと思われますが、英語圏で広く読まれたジャック・ウェザーフォードのThe Secret History of the Mongol Queens(2010年)の影響もあってか、これまでの類似の映画では従属的な役割しか与えられなかったチンギスの時代の女性に焦点を当てようという意図はありました。ただ、その「戦うお姫様」の形象は、男性的な競争原理によるマッチョイズムを単に女性へ置き換えたものに過ぎず、排除の論理の対局にある女性の「ケアの倫理」の視点を欠くもので、わたしには評価できませんし、オリエンタリズムから抜け出しているとは、およそ言い難いものでした。

『VIVANT』の場合はどうでしょう。ハッカー、女性大使や女性の自衛隊幹部を登場させてはいるものの、日本人もモンゴル人を始めとする他民族の女性の描き方、男性の描き方には、あからさまに、家父長制を前面に押し出した日本型ステレオタイプのジェンダーモデルが使われている印象です。

最も違和感をもったのは、夫のスパイとしての任務を承知しながら、紛争地域で夫を支えて働き、所属機関の裏切りで、子どもを失い、夫とともに敵に拘束され、拷問の果てに逝った主人公の母親が夫に強く復讐を望んだという設定です。結局、その復讐は意外な結末となり、その結果に母親も満足しただろうという話になるのですが、この処理の仕方は、男性目線のご都合主義との批判は免れないところかなと思います。尤も、ジェンダー論やフェミニズムからの分析は、わたしが語るより、ここにおられる今岡さんをはじめ、より相応しい方々にお任せし、検討の必要性を指摘するに留めましょう。

インクルージョンに関してはさらに大きな問題がありそうです。

先天性疾患の少女、喋れないらしい人物もキーパーソンとして登場しますが、モンゴルでも話題になることが増えたLGBTについては、現在の日本の水準から言っても改善の余地がありそうな気もします。それよりもっと気になるのは、エンドロールのキャストにごくわずかのモンゴル人の名しか見られないことです。

重要な意味をもつ登場人物のキャスティングに、明らかなホワイトウォッシングが見てとれます。

モンゴル国でロケをし、日本側の主要キャストにモンゴル語の台詞をしゃべらせておきながら、バルカ国のモンゴル語話者役に、何故、モンゴル人やカザフ人やアルタイ人の俳優を使わず、日本人俳優にモンゴル語で演じさせたのでしょうか？

例え、『征服者』(The Conqueror 1956年)でジョン・ウェイン演ずるチンギス・ハーンに違和感を覚えなくとも、『八月の茶屋』(The Teahouse of the August Moon 1956年)でのマーラン・ブランド、『ティファニーで朝食を』(Breakfast at Tiffany's 1961年)でのミッキー・ルーニーが演じる日本人を全く抵抗感なく、楽しんで見ることのできる日本人は少ないはずです。

モンゴル国内で撮影され、モンゴル国内での放送が想定されていたのなら、所謂、フォリナートーク的なものにしろ、流暢なものにしろ、日本人役のモンゴル語はよいとして、バルカ人やモンゴル人としてのモンゴル語話者役を日本の俳優に演じさせて本当によかったです？

モンゴル語の統語関係は確かに日本語に似ていますので、日本人には学びやすい言語ではありますが、他方、音韻体系が全く違うので、自然な発音はなかなか難しい。それが出来たとしても、後述す

るスパイ活動の要諦からも明らかなように、～人らしさで重要なのは、現地の人間らしい息づかいと自然な身のこなしです。

俳優さんたちの努力に敬意を払うにやぶさかではありませんが、外国人の発話として達意のモンゴル語になっていたとしても、モンゴル国で放送するなら、モンゴル語話者の台詞は、結局はアメリカでよくやるように、現地で吹替しなければなりません。実際、モンゴル国でもそうしていたという話を聞きました。

『VIVANT』の中のモンゴル語は、1982年のSF映画『ブレードランナー』(Blade Runner) の冒頭シーンの日本語のように、まあ、雰囲気さえでていればよい程度のものだったということでしょうか？おそらく、そうではないはずです。

では、何故、こんな結果になったのか、その理由は、福澤監督ら制作側の、モンゴル人やその文化に対する奇妙な思い込みによるものだと思われます。

福澤監督は放送後のインタビューの中で、「二宮さんは相変わらず飘々としていて、バルカ人の役でしたけれど、気負わずに演じてくれました。現地にいくとわかるけど、モンゴル人って日本人にそっくりなのです。文法も日本語と一緒にし、中国人や韓国人なんかと比べたら全然日本人に近い。なので、外国人という意識はそれほどしなくてもいいのかなと。」と発言しています⁵⁾。

確かに、両国に相貌が本当によく似ている人がいますので、「おまえにそっくりなモンゴル人を知っている」とか、「あなたは日本の誰々さんそっくりだ」みたいなことをモンゴル人と言いあった経験をもつ日本人は少なくないでしょうし、社交辞令としても、モンゴルの人も、「われわれモンゴル人は日本人と似ているのです」というような話をよくします。そのモンゴルの人が本当にそう思っているのか、そう言うと相手が喜ぶからなのか、わかりません。しかし、日本人の場合、相手のモンゴル人が喜ぶからというより、素直に驚き、親近感をもっている人が多いように感じます。しかし、このナイーブな親近感にこそ危ないものが潜んでいるわけです。

「福澤監督、お言葉ですが、語順がモンゴル語と似ているのは韓国語も同じ。韓国の人の中にはあまり認めたがらない人もいますが、韓国の学者も含め、「訓民正音」の成立にモンゴルのパスパ文字が関わったとする議論もさかんに行われていますし、韓国語には元朝時代、モンゴル語から入った言葉も沢山あるのでモンゴル語に近いですね。韓国語と日本語には、漢文の共通語彙があるし、日帝時代に入った語彙もあるからモンゴル語よりずっと近いですよね。顔も似ているし、長い通婚の歴史もありますね。韓国ではいま漢字を使わないけれど、日本人は、モンゴル人がずっと断固拒否した漢字を、それも、中国の人だっていまは使わないような古い漢字を護りつけ、儒教的教養も大事にしているのに、韓国や中国とはお互いにあまり仲良くないみたいに見えます。日本人とモンゴル人じや、自然環境も生業や暮らし方も全く違っているのに、どうして『全然近い』と言えるのですか？」とか、「日本映画界は、戦時中、日本の実効支配下のモンゴル地域で初めてロケをした映画『成吉思汗』のチンギス・ハーン役に戸上城太郎を選びました⁶⁾。その後も、1980年、中華人民共和国中央広播事業局、日本中

5) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年) 315頁。

6) 1943年に、戦時統制下にあった大映京都撮影所が、蒙古聯合自治政府後援を謳い、現地ロケ、現地軍の全面協力により制作した映画。主要キャストはすべて日本人俳優が演じている。完全なオリジナル・フィルムは現存しないとされている。なお、同じ、大映京都撮影所により、1944年公開された『かくて神風は吹く』という『元寇』を描いた国威発揚オールスター映画が作られていたことも興味深い。『かくて神風は吹く』と日本人のモンゴル観については、拙論「神風とシン・ゴジラのしっぽ」(『日本映画学会会報』第51号2017年7月)で触れている。なお、ハリウッド映画に見るモンゴル人像については、スピルバーグ作品について論じた、拙論「The Mean Mongolianについて」(『日本映画学会会報』第19号2009年9月)を参照されたい。

国文化交流協会協力のTVドラマ『蒼き狼 成吉思汗の生涯』では加藤剛、民主化後のモンゴル国で撮影した2007年の角川春樹製作総指揮の『蒼き狼 地果て海尽くるまで』では反町隆史がチンギス・ハーンを演じました。他にも、2008年には浅野忠信が現代モンゴル語でチンギスを演じるカザフスタンの映画もありましたね。そんな映画をモンゴル人が喜んで見ていると思いますか？日本人は、源義経をモンゴル人俳優が演じる『新平家物語』を見たいですか？」などとモンゴル人が言うかも知れないという想像力が全く欠けているのです。「相手の靴を履いてみよう」とする知的操作としてのエンパシーを欠いた情緒的な「共感なき親近感」というのは極めて厄介なものです。

制作側は明らかにエスノセントリズムに陥っているのです。そして、それは「自分たちは中華思想の中国人やフランス人とは違う、モンゴル人の友達、遅れているモンゴルを助けてあげる父、兄なのだ」という傲慢なパターナリズムに繋がっています。

ドラマの終盤に、その傲慢さが如実に現れたシーンがあります。悪の組織「TENT」の解散を決意した元警視庁公安部外事課のスペーイにして謎の国際テロ組織の首魁が、バルカの弱者救済と引き換えに悪の組織の解散を宣言し、日本へ去る場面です。

黒澤映画風に、家紋を染め抜いた旗が風を受けてはためく草原に、国際俳優役所広司演じるノゴン・ベキなる人物が登場し、配下の人々に別れを告げ去っていくシーンです。

なんと、バルカのモンゴル語話者たち（呆れたことに、モンゴル建国の祖、カミとも崇められるハンと同じ「チンギス」という名前の警察官も含まれています）は、土下座、平伏して、彼を見送ります。

勿論、現代のモンゴル人が土下座することは普通ありませんし、半沢直樹やカスハラクレーマーのように、人に土下座を要求することもありません。

「20世紀のはじめ、モンゴル人は、清朝と袂を分かった時、満洲皇帝にとってかわろうとする漢人から跪拝礼を求められて烈火のごとく怒ったことがあったんですよ」とか、「山口幸二さんという言語学者が書かれたように、ある時代まで、サムライということばは、アジア、とりわけ、大日本帝国の植民地や占領地域だった国の言語の中では、極めてネガティブに使われており、モンゴル語においてもそれは残虐な悪鬼のようなものを示す言葉であった時代があったんですよ。ほら、この1999年に北京で刊行された『新蒙漢詞典』に「②日寇」と書かれているでしょ」とか、説明してくれるモンゴル人や通訳者はいなかったのでしょうか。いえ、誰かがそんなことを言ってくれていたとしても、このシーンは決して変更にならなかつたはずです。

福澤監督たちは、日本のオーディエンスのために、こういう絵がほしいと思っていたはずですから、制作現場のモンゴル人は、1980年に米国で放送されたジェームズ・クラベル原作の『SHOGUN』というTVドラマがオール日本ロケで作られたときの日本側のキャストやスタッフと同じように、「これはいかがなものか」と思うことがあったとしても、ビジネスとして割り切り、飲みこまねばならなかつたのです。「世界のミフネ」がなんと言おうと、結局、アメリカ人が見たいものが作られた『SHOGUN』での構図で、アメリカ人と日本人が入れ替わっただけなのです。

実際、『VIVANT』撮影に協力した現地のモンゴルの人たちは、撮影されている作品がどんなものになるのかを知らされていなかつたようです。大きな期待をもつた作品の一部鑑賞の機会が与えられた後、大きな失望を抱いたモンゴルの人たちは少くなかったですと聞きました。

仮に現場のモンゴル人が我慢したからと言って、オーディエンスとしてのモンゴルの人たちがそれを快く受け入れるかどうかは別の話ですし、例え、寛大なモンゴル人視聴者が許すとしても、「この程

度のことは許容し、我慢してくれているから、このままでいいじゃないの」と考える態度こそが、エスノセントリズムなのです。

また、『VIVANT』に現われるサムライ的イメージの自己オリエンタル化の問題もありそうです。

司馬さんの作品等でもよく知られる、主に非サムライ階級出身者で組織されていた新撰組の言い立てた「士道」なるものは特殊な発明品でしたし、新渡戸稻造の『武士道』は、キリスト教徒の新渡戸が、近代西洋文明の中のエーツへの批判と、消えゆく日本のエーツを、自分の妻を含むアメリカ人たちへ強弁するために書かれたもので、まさに「近代のための発明品」でした。新渡戸は、近代の功利主義、実利主義、そして個人主義に対峙できるエーツがほしかったのですが、それを過去形で語るしかなかったわけです。

新渡戸の武士道を剽窃して、昭和の帝国陸軍的サムライが言い立てられ、日寇や鬼子というようなイメージを拡散することになったのです。さらに、それが、尾崎士郎のベストセラー『成吉思汗』(1940年)の「モンゴルの征西の後継者は日本人だ」というような妄想と結びつくことになります。

戦後のある時期まで、日本人の中には戦前戦中のサムライ像への反省的な雰囲気が間違なくありました。1950年代、黒澤明監督の『七人の侍』が封切られた頃、右翼側からも左翼側からもそのサムライ像に強い反発が示され、議論が起こったのです。しかし、今日、スポーツのナショナルチームにサムライの名を冠することの是非について、真剣な議論は全くといっていいほど起こらないのです。

チャンバラ映画のルーツであるハリウッド的なカウボーイ像が修正された程度にすら、メディアにおけるサムライ像は修正されることなく、逆に自己オリエンタル化によって強化され続けています。昔、横山大阪府知事が大阪のたこ焼きをサムライ・ボールと呼ぼうと提案し、鞆蟹を買ったことも今は忘れ去られ、サムライマックなるハンバーガーの日本での発売に文句を言う人たちはいません。

『VIVANT』では、本来、職能集団で非サムライ階級である刀鍛冶の家系の人物がサムライ的なイメージと武士道を普遍化しようとします。

ノゴーン・ベキの日本刀による制裁場面等、刀とサムライ的イメージに力点が置かれるのは、欧米をはじめとする海外のオーディエンス向けのサービスであり、海外市場向けのマーケティング戦略でしょう。しかし、日本刀のイメージは2023年に全米ヒットした、女性歌手SZAの「Kill Bill」のプロモーションビデオに見られるように、サムライ的エーツとは全く無関係で、「ヤクザ」的、剥き出しの過激な暴力性の美的アクセサリーとなっているのです。

実際のところ、歌舞伎や新国劇や東映健全娯楽時代劇など一度も見たこともない世代の日本人のサムライ像は、まさに、ハリウッド映画のホワイトウォッキングの代表例として米国でやり玉に挙げられる『ラストサムライ』(The Last Samurai 2003年、エドワード・ズウィック監督、トム・クルーズ、渡辺謙共演)のcultural appropriation(文化盗用)を再生産した自己オリエンタル化の産物です。

結果的に、『VIVANT』に映し出されている日本人の姿は、「世界を救うのはアメリカの白人」という典型的なホワイトウォッキング構造を、「戦乱にあえぐ後進国バルカのモンゴル人たちの危急を救うサムライ的日本人」に入れ替えただけのものになってしまっています。

日本の人たちの中には、自分たちが、非西洋人であるから、オリエンタリズム的な傲慢さ、差別主義から免れていると勘違いしている人が少なくありません。在日本のモンゴル人の人たちは、遠慮してあまりはっきりと言いませんが、日本人の少なからざる部分に、モンゴル人への差別意識や優越感が存在するということを、しっかりと自覚し、改善の意識をもたねばなりません。学生、コンビニ店員、

会社員、大学教員、お相撲さんまで、故なき差別に耐えている人たちがいるのです。

勝手な根拠なき親近感を抱きながら、《氏名がそろっていないと入管手続きはできない》とか、《日本に「帰化」しなければ、「国技」たる相撲の親方にはなれない》とか、《日本国籍が欲しければ、アメリカ在留資格のある配偶者と離婚しろ》とか、公的な場所で差別発言を繰り返しても、何が問題なのか分からぬ人たちがいまでもいます。「大谷翔平選手がアメリカ市民権を得られなければ、MLBにはいられません」とでも言われようものなら人権侵害だと大騒ぎする人々の中にもそんな人たちがいる可能性があります。

蛇足の説明をしておくと、「帰化」ということばは、本来、君王の徳化に帰服することです。かつて、内モンゴルのフフホトは帰化城と呼ばれていました。中華世界で狄や蒙古など非漢人がより高度な漢族の文明に帰属を求めてきたことを指す「帰化」は、ある意味で差別的な言葉で、エスノセントリックな中華思想的世界観を露骨に示すことばですから、naturalization の日本語訳語としては大いに問題があります。国技ということばは、近代に誕生した野球について使われた national sport の翻訳語に過ぎず、日本語の伝統的語彙ではありませんし、興行相撲の歴史は相撲協会自身が認めているように、古代の相撲、とりわけ、神事とは直接的な関係はありません。土俵から女性を排除する理由は、伝統とは全く無縁の近代的なものです。

既にここまで、無前提に使ってしまったが、オリエンタリズムということばの定義について確認しておきます。

ここで言うオリエンタリズムは東洋趣味という芸術や建築での用語ではなく、エドワード・サイードの定義した意味、乱暴に約めてしまうと、「西洋の東洋に対する思考と支配の様式」のことです。

パレスティナ出身の比較文学者であるサイードが最初に示したのは、イスラームについての西洋社会の言説や態度でしたが、この問題は、イスラーム世界だけにあてはまるではありません。いまでは広く、近代社会の二項対立的な異文化への態度として用いられることばです。

『VIVANT』の中のイスラームの扱いにも大きな問題があります。

日本の映画は、手塚治虫・北杜夫原作の東映動画『アラビアンナイト・シンドバッドの冒険』(1962) や、藤子・F・不二雄原作のシンエイ動画「ドラえもん のび太のドラビアンナイト」(1991年)を見ればわかる通り、1924年公開のハリウッド映画『バクダッドの盗賊』(The Thief of Bagdad ラオール・ウォルシュ監督、ダグラス・フェアバンクス主演)のイメージのコピーからほとんど離れられず、連綿と西洋のオリエンタリズムの片棒を担いできたのです。

楊海英さんの『モンゴルとイスラーム的中国』(文春学藝ライブラリー 2014年)を読んでもわかると思いますが、モンゴル語圏のイスラームを扱うというのは結構複雑な問題で、職業的研究者でも少し腰の引けるようなセンシティブな課題なのです。

ところが、『VIVANT』では、そんなことにはお構いなしに、1960年代ハリウッド映画並みに単純化された世界観と、ステレオタイプのイメージが提示されます。

もし、誰かが「モンゴル人のムスリームがサウジ風の衣装を着用することがあるだろうか?」と首を傾げても、「いやいや、その辺りのことはわたしたちも十分に分かっていますが、そこはそれ、エンタメですのでねえ、短時間で物語を理解してもらうためにはステレオタイプ理解で分かり易くしないと、ストーリーが追えませんからね・・・」とかいう反応が返ってくることは誰にも想像できてしまします。

当今、ジーンズの上にまわしをつけて、浴衣に肩衣つけて、文金高島田に結って、隈取して、バグ

パイプで越天樂を演奏しようと文句を言われる筋合いはありません。しかし、「月の砂漠」的な常套的イメージはともかく、オリエンタリズムのお手本のような映画『アラビアのロレンス』(Lawrence of Arabia 1962年)へのオマージュ的な映像を安易に使い、テロリストを本質化してしまう姿勢、あるいは、GPS を駆使する牧民がいるという事実は無視して、「遊牧民はスマホをもっていない」と断じるような誤ったステレオタイプの世界観の拡散は、支配の道具になることを忘れてはならないのです。

安易なステレオタイプの再生産は、中央ユーラシアの歴史への正確な理解を欠くだけではなく、現在進行中の政治的不安定の元凶である、nation state と西洋支配の歴史的問題を覆い隠して、眞の加害者と被害者の関係をミスリードすることにつながるのです。

将来の市場としての中華社会への配慮か、中華人民共和国版図内のムスリームやキリスト教徒、多くのエスニック・グループの問題には敢えて触れず、武装集団=ムスリームとして描いて見せるのは、9.11直後のブッシュ政権なみの単純化だとの批判を受けてもしかたがないところでしょう。

テロリストという言葉を安易に使うのは危険です。幕末、英國公使館焼き討ち事件の際のイギリス人から見れば、高杉晋作の影響下にあった伊藤博文はテロリストだし、韓国統監だった伊藤博文を殺した安重根は日本から見ればテロリストですが、韓国からみれば民族の英雄です。モンゴル国の国際的環境活動家ムンフバヤルは、ウラン採掘に関する国際的な契約の成立を目前に控えた時期、テロリストとして、懲役21年を宣告されました。

雑草という本質をもつ植物がないように、テロリストの指すものは立場によって異なるのです。

地政学的、歴史的事実の変更の他に、宗教的リテラシーへの配慮を欠く設定が、架空の国バルカの内戦状況の説明に登場します。

これは、警視庁公安部外事課の会議室で、バルカの内戦状況と別班の任務について説明する場面と、悪の組織に乗り込んだ主人公にノゴーン・ベキたちが説明するバルカの紛争の歴史に登場します。

ノベライズ本のノゴーン・ベキ側からのバルカ人の説明には、「ご存じのとおりバルカという国は異なる宗教を信仰する四つの民族が暮らす多民族国家です。キリスト教のロシア系。仏教のモンゴル系、社会主义を信奉する中華系、アッラーをあがめる《イスラム系》⁷⁾」となっていますが、放送された画面では、公安の会議室でのスライドと同じ、「カザフ系民族 イスラム教」というタグが現れます。

現代カザフスタンにとって喫緊の課題は、カザフ人のマイナリティー化を防ぐために国外のカザフ人をいかに国内に呼び込むかということであって、宗教問題ではありません。

活字でカザフを名指しすることを避けているノベライズ本は、「～を信じる～系」という言い方で3つの民族を並べた後、「イスラームのイスラーム」と同語反復してしまっています。ユダヤ教を信じるユダヤ人ということを言うことは可能ですが、それは、ユダヤ教を信じないユダヤ人とか、キリスト教徒に改宗したユダヤ人等の存在を前提としています。

イスラーム教を信じるイスラームとか、イスラームからキリスト教に改宗したイスラーム人とか言えるでしょうか？シリア人とインドネシア人とウイグル人をイスラームとまとめることはできても、ロシア系、モンゴル系、中華系のカテゴリー区分に相当しないはずです。ソ連時代のロシア人はキリスト教徒で、中華人民共和国の漢人社会を共産主義思想でまとめるのは余りに乱暴です。

モンゴル人=仏教徒ではありません。2024年2月現在の米国 CIA の The World Factbook の示す

7) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年)195頁。

2020年現在の統計では、仏教徒51.7%, ムスリーム 3.2%, シャマニスト 2.5%, キリスト教徒 1.3%, その他 0.7%, 無宗教 40.6% (2020 est.) となっています。ロシアの場合、ロシア正教徒15-20%, ムスリーム 10-15%, ロシア正教以外のキリスト教徒 2% (2006 est.) となっています。『VIVANT』の設定の1970年代末から1980年代中頃はと言えば、ソ連とモンゴル人民共和国と中華人民共和国の時代です。そもそも、当時の政治体制下で厳しく禁じられていた「宗教」を軸とする民族戦争が起こるはずもないのです。

ちなみに、CIAは2021年現在の中国の宗教事情を民間宗教 21.9%, 仏教 18.2%, キリスト教徒 5.1%, ムスリーム 1.8%, ヒンドゥー教徒 0.1%, ユダヤ教徒 0.1%, その他 0.7%、無宗教 52.1% としており、過去も現在も中国人は「コミュニズム」を宗教に準ずるものとして信じているとは言えません。

民族と宗教は等号で結ばれるものではありませんし、シベリアから中央ユーラシアにかけて、かつて、また現在も、ロシアや中国、あるいはヨーロッパが恐れるのは、大日本帝国が軍事的に利用しようとした汎モンゴル主義や汎ツラン主義の台頭です。

モンゴル・チュルク(トルコ)系の複数の集団が存在する仮定でのバルカ国でのテロ行為が専らイスラーム武装勢力からもたらされるという印象づけ、そして、その原因を安易に宗教対立とまとめるご都合主義的な設定は、バルカ(モンゴル)に対する日本の優位性を語るノゴーン・ベキの次のようなセリフにつながっています。

「日本では古くからあらゆるものに神は宿っていると考えられてきた。神はひとつではないという考えがあることで、相手の宗教にも理解を示し、違いを超えて結婚することもある。日本には考え方の違う相手を尊重する美德がある。」⁸⁾

残念ながら、日本人は特別に宗教的に寛容なわけではありません。神学者の森本あんりさんの言葉を借りれば、「日本人は宗教的に無関心」なのです。勿論、無関心でない時期には、とびきりの不寛容さを發揮してきました。折しも、2022年から2023年にかけては、元和の大殉教400年記念の年でした。母親と幼い子供と一緒に柱に縛りつけ、笑いながら焼き殺すといったことが公開の場で行われていたのです。江戸幕府が倒れても宗教弾圧は続き、明治憲法発布後も何度も起り、第二次大戦前の奄美で起った弾圧は苛烈を極めました⁹⁾。しかし、世界中で知られているそれらの事実についてでさえ、日本の学校で詳しく教えられることはありません。だから、いまでも、イスラーム教徒やキリスト教徒が地鎮祭への出席を求められたり、自治会から氏子でもない神社への寄付を強制され、それを拒否すると、宗教的不寛容だと詰られたりするといったことが毎日のように起こるのです。

自らのIQの高さを誇るノゴーン・ベキの発言は、宗教(religion)と靈性(spirituality)、アニミズムと多神教、汎神論との区別もろくにつかず、朝廷の儒仏神融合の政治イデオロギーや、近代の教派神道や国家神道についての分析的な理解もなく、スパイにとって常識である、近代における「宗教戦争」の本質が宗教教義論争と別の利害に基づいているという最も基本的な知識をも欠いています。

何故、こんな安っぽいセリフが、いかにも重々しく語られるのでしょうか。元公安部外事課スパイにしてテロリスト集団の首魁の信条を、偽サムライや偽保守主義者のカリカチュアとして描くことで、何を示したかったのでしょうか？

偽伝統主義者ベキの語る古き日本の「考え方の違う相手を尊重する美德」はドラマの一体何処に見られ

8) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年) 277頁、TVも同じ。

9) 奄美の宗教弾圧については、宮下正昭『聖堂の日の丸 - 奄美カトリック迫害と天皇教』(南方新社 1999年)。

るでしょう。日本の公安警察が「日本、諸外国もご子息を追うことはないでしょう。ただ国内、バルカ警察は違います。しかし、そこはわたしが抑えてみせます」と豪語し、自衛隊の別班が、「ここをどこだと思っているんだ、バルカだぞ」と言われて「そんな恫喝に日本は屈しない」と切り返す態度の中にはその欠片もみられません。そうした傲慢な態度の裏にはどんな歴史が隠れているのか、2つ目のお題にうつることにしましょう。

2 烈士の碑 あるいはスパイ神社

『VIVANT』の中で日本を舞台とする場面では、神社が度々登場します。

主人公のルーツである出雲大社の他に、神田明神がはっきりと分かる形で出て来ますが、将門が祭神になっている神田明神も出雲系の神社とされているので、アマテラス系による非アマテラス系カミのための神社です。朝敵側へ配慮を払う神社であるというところと主人公が冒頭にイスラームやキリスト教の神の名と天照大神を並列させるところなど、なかなか興味深い設定です。

『VIVANT』では、対立する日本の情報組織、警視庁公安部外事課と陸上自衛隊の情報部別班は互いに相手を監視しています。靖国神社が大きくフレームされていないのは、現実の警視庁公安部が、三島事件のようなクーデター計画等をチェックする役割も担っており、自衛隊員の靖国参拝の動きにも注意を払うことが既に世間に知られているからかもしれません。ちなみに、警視庁公安部の前身は、所謂特高警察ですが、その総元締めは内務省、内務省の中には神社局というものがありました。

いずれにせよ、靖国神社の名前を表に掲げてなんらかの意味付けをするのはテレビ局としては剣呑ですから、「触らぬ神に」なんとやらというところでしょう。

幾つかの裁判で知られている通り、自衛隊員は勤務中に亡くなると、嫌でも靖国神社に合祀されてしまします。これは、政教分離の原則からも、祀られたくない遺族にとっても大きな問題です。しかし、大日本帝国時代には、遺族たちが合祀を切望したのに祀られない人たちがいたのです。大阪大学箕面キャンパスにある「烈士之碑」は、そんな人たちに纏わる重要な歴史記念物なのです。

烈士之碑は現在、大阪大学箕面キャンパスの時計の裏の目立たぬ場所にありますが、その前は、箕面市の別の場所にあった大阪外国语大学キャンパスの同窓会会館の横に移設されていました。もともとは、大阪市の上本町八丁目にあった大阪外国语大学、その前身である大阪外国语学校の正門近くにあったものです。

大阪外国语学校という学校は、1920年に海運業者林竹三郎の妻林蝶子から新設費100万円の寄付を受け、1921年末の勅令により設置、翌1922年から学生への授業が始まった国立の学校です。

誕生の1921年といえば、奇しくもモンゴルが1911年の独立後の日本を含む大国の干渉と混乱の10年を経て、ボルシェビキ勢力と組んでようやく活仏ボグド・ゲゲーンを元首として再び独立国となつた頃、昭和天皇が皇太子としてヨーロッパ歴訪を行った年でもあります。

第一次世界大戦の戦後期、次の大戦への火種をかかえつつも軍縮を試み、日本は、大正デモクラシーの最中、国際化の時代を迎えていました。

学校のキャッチフレーズは現在の大坂大学外国语学部でも使われている『EX ORIENTE LUX ET PAX』。「光と平和は東方から」というラテン語です。校歌もそういう気分に溢れていました。(大阪外国语大学も同じ校歌でしたが、戦時中の外事専門学校時代はこの校歌を歌わなくなっていました。)

歌詞は、「世界をこめし戦雲ようやくはれて 東の空に暁の明星ひとつ これぞ大阪外国語学校 建てよ建てよ 平和の旗 叫べ叫べ 愛のことば 輝かせ 文化の光」

この歌詞を書いたのは、東京外語出身の松永信成(1892-1924)露語部初代教授です。その当時、国立学校の校歌に「叫べ、愛のことば」と書くことができたのは、ロシア文学の翻訳者であり、自身も詩人であったキリスト教徒、松永教授なればこそだと思います。

モダンなのは校歌だけでなく、制服も詰襟ではなく、スーツタイプのものでした。

大阪大学外国語学部の人たちにも、是非、覚えておいてほしいのですが、最初、大阪外語は、平和と博愛のための学校だったのです。

しかし、開学間もなくそれが一変してしまうのです。

1923年に、蒙古満州および、これに関係のある諸方面に関する研究調査を目的とする満蒙研究会なるものがつくられます。「ああ実に満蒙こそ我が国民の死活問題たるの地なり。蒙古部の有志、相謀りて蒙古の研究を目的とする満蒙研究会を設立せり」というわけです。

こうした動きの中で、1931年2月に、学生たちは中目覚校長の排斥運動を行うのです。この始まりは代返がどうのという実に詰まらない話です。それが学生ストライキという騒動になり、校長の罷免要求にまで拡大します。中目校長は有名な地理学者にして言語学者。樺太のギリヤーク研究が有名で、もともとドイツで研究していて、多言語に通じたエスペランティストでもありました。大阪外語の東洋語重視を打ち出したのもこの人です。当時としては、ある意味、リベラルな人だったと思います。排斥の急先鋒は蒙古語の人間だけではなく、英語部をはじめとする西洋語にも多かったのです。

1931年の11月には、「愛国心に燃ゆる」若き六百人の学徒は連盟理事国代表に声明書を発送します。外語ですから、いろんな言語で国際連盟の理事国代表に声明書を送ったのです。「満州事変は日本に非はない」と国際連盟の代表に声明文を送る学生大会があったのです。

満州事変後、大阪外語の蒙古語に、爆発的に受験者が集まり、すごい倍率になってしましました。学生の学習意欲も高まり、特務機関その他で活躍できるようになってくると、学科は「わが世の春を謳歌する」という事態になったわけです。そして、1936年「綏遠事件」の頃になると大阪外語の卒業生たちの中から犠牲者が相次ぎます。¹⁰⁾

大阪大学にある烈士之碑を、一般戦争犠牲者に対する慰霊の碑だという風に説明する人もいますが、少なくとも誕生の意義は全く違います。祀られねばならなかった人々は、まずもって、軍籍のない、特殊工作員だったのです。

トム・クルーズ主演の『ミッション・インポッシブル』(Mission: Impossible) という映画をご存じでしょうか。あの映画の元は1960年代のTVシリーズですが、物語の冒頭、秘密工作員リーダーへ、自動消滅するテープで指示が与えられます。テープの消滅前、必ず、次のような言葉が流れます。

As always, should you or any of your IM Force be caught or killed, the Secretary will disavow any knowledge of your actions.

諸君が捕まつたり、殺されたりしても当局は一切関知しないからそのつもりでというわけです。こうしたアメリカTVドラマに刺激されて作られたチャンバラTVドラマ『大江戸捜査網 アンタッチャ

10) 大阪外国语学校、大阪外国语大学の歴史については、大阪外国语大学同窓会(編)『大阪外国语大学70年史・資料集』1989年、大阪外国语大学同窓会大阪外国语大学70年史編集委員会(編)『大阪外国语大学70年史』1992年等の資料があり、本講義も直接関係者から聞いた話の他は、主にこれらの資料によっている。なお、現在の大阪大学外国语学部の公式WEBサイトには烈士之碑に関する記述は全く見当たらない。(最終確認2024年3月13日)

ブル』のナレーションで言えば、「御下命 如何にても果すべし 尚 死して屍拾う者なし」ということになるわけです。

特殊任務を隠密裏に行う工作員は、軍の特攻隊員とは全く違うものです。「政府や軍の機関の命令によって活動しているとは、あなた方も、政府や軍も口がさけても言えませんよ。それを分かっての任務ですよ」という前提です。当然、日本のスパイ、海外での工作員たる特務関係者は、天皇の正規軍の犠牲者のための靖国神社には祀られません。

それを承知の本人は納得していても、遺族や仲間は黙っていられない。「兵隊は戦死すれば靖国神社にまつられるのに、満州国の建国に献身するものが、なぜ神にまつられないのか。外語神社をつくれ」と國に求めたけれど、それは許可にならなかった。それなら、自分たちで「烈士之碑」を建てるぞという話になって、日中戦争が始まった頃に募金運動を開始して、1938年6月に除幕式を行いました。

いま大阪大学の外国語学部にある烈士之碑は、靖国神社には祀られない特務機関員を顕彰する、謂わば、「外語出身のスパイのための神社」だったわけです。

この碑には、蒙古聯合自治政府の徳王自らも参拝していますから、彼ら「烈士」の行動は建立当時から「公然たる秘密」でした。日米開戦後には、最初の経緯も忘れられかけはじめていたようですが、1942年に入学して43年には陸軍に取られてしまう司馬さんの在学時代の写真の背景にも烈士之碑がしっかりと映っています。(大阪外国語大学同窓会咲耶会 会報咲耶 No.10(1999)の表紙。)また、1943年11月には、烈士之碑に新たに18柱が合祀されたとの記録があります。

司馬さん 在学当時の蒙古語科の雰囲気は想像に難くありません。わたしの在学中の外大にも残っていましたが、校舎には中庭があって、そこに小さな池があったのですが、そこに裸になって座らされたりする。そういう日常が司馬さんには耐え難かったはずです。一部の同期同窓生たちは司馬さんがそれに馴染んでいたと回想していますが、彼に限らず、嫌でも馴染んでいるふりをしていなければ、すこぶる面倒なことになってしまいます。司馬さんを含め、少なからざる学生が同調するふりをしていた可能性は大いにあるのです。それは、司馬さんが『菜の花の沖』の中で、いじめを日本の精神文化のなかでもっとも重要なものの一つとして、ことさら激しく批判していることでも分かるはずです。

1987年、司馬さんは、大阪外国語大学の求めに応じて、「四海への知的興奮」と題する短い文章を書き、「身辺で、大阪外国語大学に入ったひとに出会ったりすると、「いい大学に入ったな」と、心から祝うのである。そこで学ぶ学問は、生涯そのひとを愉しませつづけるはずだということを、私は知っている」と新入学生を祝福するのですが、1991年の『なぜ小説を書くのか』という談話の中では、「この学校はその頃、私の夢を満たしてくれるような内容を持っていませんでした。ひたすら実務的な学問を教える学校でした」と、植民地学に象徴される実学の学校が、嫌で堪らなかったことを語っています¹¹⁾。

外語学校の蒙古語を出たからといって、必ず、満洲や「蒙古」で好い目を見るというわけにはいきませんでした。満鉄の調査部のエリートたちはほとんど東大出で、あとちょっと京都帝大ぐらいの人がいて、東京外語はまだましで5人いるのですが、大阪外語の出身者は、1人しかいない。大阪外国語

11) 「なぜ小説を書くか」『司馬遼太郎が考えたこと 15』(新潮文庫、2002年) 88頁。気遣いの人である司馬遼太郎の面目躍如たる「四海への知的興奮」は、現在の大坂大学外国語学部の図書館にも掲げられており、同大学の宣伝にもしばしば使われる。現在の大坂大学の学生や教職員には、大阪外語学校や国立2期校時代の大坂外国語大学の鬱屈は想像しがたいかも知れないが、「四海への知的興奮」には、「大学はブラックティカルな語学教育や国策的実学教育の場に堕してはならない」という強い警告が含まれていると考えるべきだろう。

学校蒙古語部の一期生であった情松源一さん（故大阪外国語大学名誉教授）でさえ、最初は満鉄に行こうと思ったけどダメだったと言っていたくらいです。

外語卒の「烈士」たちは、帝大出のエリートは滅多にやらない「特務」という汚れ仕事を進んで引き受けていたのです。その「特務」の仕事とはどんなものだったのでしょう。

「特務」の実際については、後藤富男「善隣協会は何をやり残したか」（善隣会編『善隣協会史：内蒙古における文化活動』（日本モンゴル協会 1981年、概観6頁）から、少し長くなりますが、引用しましょう。

この協会は、定款によれば「人道的見地ヨリ比隣諸民族トノ融和親善ヲ図リ、相互文化ノ向上ニ寄与スル」ことを目的として、この年一月、財團法人として東京に設立された文化団体である。比隣諸民族とはあるが、当面のねらいはモンゴル民族であり、しかもチャハル、スイユアン両省にわかつて中国の主権の下にある内蒙古がその対象となっていた。

・・中略・・ 班の構成員として、このほかなお重要なものに渉外工作員があった。

彼らの任務は、いわば協会活動の耳目となって、それぞれ担当する地区をたえず移動し地域の特性や治安の状況、牧民の分布や生活状態などを調査し住民や家畜の疾病をはじめ、日常生活におけるさまざまな相談相手ともなり、必要に応じて協会の診療機関などにこれを送ってよこすことなどであった。それには何よりもまず現地人の生活習慣にとけこみ、彼らのことばを自由に駆使できるとともに、親しい友人として信頼をかちえることが先決条件であった。班には旧制の中学校を卒業したばかりの青年が何人かずつ配属されていたが、さっそくひとりひとり付近を遊牧する牧民のイル（帳幕）に預けられて、モンゴル人としての生活にはいったのである。半年あまりもたって、彼らがふたたびあらわれたときには、モンゴルの服装もすっかり板につき、弁髪になっていた者も多かった。住民の日常生活には意外にやかましい礼儀作法があり、歩きぶりのようなちょっとした身のこなしにも、なかなかまねのできない独特のくせがある。そうしたささいな身のこなしまで、若者たちは熱心に学んで、モンゴル人になりきろうとしたのであった。

これら工作員が各地から寄せた調査報告にはきわめて貴重なものが多い。彼らはそれぞれの地区を足で歩いて、ラマ寺廟の沿革、構造、勤行、経済とか、漢人行商の取引の実態、商品の価格や種類とか、牧民の家畜所有や牧畜技術など、かつて行われたことのない遊牧民生活の実態調査を、木箱を机としロウソクをたよりに、なまなましい記録につづって、これを支部に送りとどけてきた。

だが、なによりも強調しておかねばならないのは彼らのすべてが、現地の住民に心から親愛の情を抱いて、例外なくその友人となったことである。工作員などというと、ともすれば政略的な意図を感じるが、善隣協会のこれらの青年たちにかぎって、そうした陰影はまったくなかった。これはややのちの話であるが、太平洋戦争の形勢が日に日に不利となるにしたがい、満洲国はもとより蒙疆における日本の民族政策はしだいに余裕を失って、露骨な圧制に転じた。重要なのは戦争遂行のための家畜資源であり、モンゴル人ではなくなつたのである。そのときこれらの青年たちは、「奥地」モンゴル人の代弁者となって、出先の軍部や張家口政府に、しばしばどなりこんで激論をたたかわす風景が見られ、彼らは「土民軍」と呼ばれて厄介視されたのである。

若い頃、わたしは、父と同世代の元特務という方々が苦手で、聞き取り調査のようなことをしませんでしたが、興亜義塾出身のKさんという、（とても有名な方で自分の活動についての著書もあります

し、お名前をだしてもいいのですが、ここはちょっとそれっぽく、Kさんとしておきましょう)、元スパイだった方に会ったことがあります。モンゴル語はとても上手かったです。下手な者がいるのもなんですが、モンゴル語の上手な話し手を沢山見てきましたが群を抜いていました。居合わせたモンゴルの人たちが「あの人は、どこのモンゴル人?」と尋ねてきたことをいまでも覚えています。語彙の豊富さとか、発音の正確さとかだけではなく、モンゴル語を使う時の息遣いや所作がモンゴル人そのものなのです。

この方も善隣協会の工作員は、平和部隊などのような米国団体の人たちに似て、少なくとも最初のうちは、信じられないほど純真で理想に燃えており、後には軍部と対立することになったという趣旨の回想をしています。「モンゴル人の代弁者」という気分は、あながち、自己弁護のためだけの発言ではないでしょう。興味深いことに、Kさんは、戦後、イギリスやアメリカの情報機関のために活動をしています¹²⁾。

善隣協会の横に、西北研究所というものが作されました。これは蒙疆地区のイスラーム事情調査のためにつくったものですが、新疆側のイスラームと日本軍が提携して、中国を牽制する目的があったのです。日本のモンゴル研究や、イスラーム研究、生態学や文化人類学が出来上がってくる過程でのこうした組織の果たした歴史的な役割を忘れてはならないと思います。

フランスの文化人類学がアフリカなどの植民地体験から生み出されたように、日本の学問もその旧植民地体験から生まれてきたものです。今西錦司博士のような人たちによって、戦後の京都大学人文科学研究所のベースもできあがるわけです。当時西北研究所の一番若手が梅棹忠夫さんだったわけですが、彼らはエリートですから、自分がスパイになるわけではなく、特務の人を利用して研究する側の人たちです。敗戦後の混乱、満洲の日本人がわが子さえおいていかねばならない状況下に陥る中で、ごっそりと研究資料を持ち帰ることすらできたのです。だから、特務の人たちのやってきたことに余り批判的な言説は残していません。ただ、磯野富士子さんは違いました。西北研究所に属しながら、現地の普通のモンゴル人たちの中に入って、一緒に生活してモンゴル語とその文化を学んだ彼女は、「男の人たちが、自分たちが調査に行くときにモンゴル人の人たちを押しのけて、自分たちが調査員として平気で上座に座るような、そういうやり方はおかしい」とずっと言い続け、終戦後の混乱の中で特務の人たちのとった身勝手な行動も痛烈に批判しました。

烈士之碑は、現地の人々のために働くことと自国の国益のために働くことが一致することを夢見て、現実にはその乖離に直面し、葛藤に苦しみつつ、国益のために犠牲になり、自國から顕彰されることのなかった人々が現実にいたことをいまに示しています。

『VIVANT』の描く世界は、烈士之碑の歴史と直接つながっているのです。

自衛隊の闇の仕事をしている主人公の所属はあくまで一般企業で、その「軍籍」が明らかになることはありません。主人公の父親は、元警視庁公安部外事課のスパイで、援助目的を隠蓑に国益のために派遣された人物です。それらの人たちが、モンゴル語を話す現地の人たちの利益と、自らの国益の板挟みになるという設定は、『VIVANT』というドラマのために生み出された目新しいフィクションではなく、日本の歴史的現実そのものなのです。

上本町八丁目のキャンパスから、大阪外国語大学箕面キャンパスへ移設され、同窓会会館の横に鎮

12) 戦後の CIA 等米国情報機関における元大日本帝国スパイのリクルートについては、ほぼティム ワイナー著『CIA 秘録 上下』(文藝春秋、2008 年)等に述べられている通りであったと想像できる。

座していた烈士之碑の土台部分は、大阪大学箕面新キャンパスへの移転に際して破壊されました。その新キャンパスは、日建連表彰 BCS 賞なるものを受賞しており、その受賞理由には、「エントランス周りには、地域との接点となる場が設けられ、大学と地域とが多様な活動を展開し、まちづくりに大きく貢献している。一方、1階北側のエントランスには、25言語のメッセージを刻んだ石碑が象徴的に設けられ、さらに旧キャンパスの遺産である「烈士之碑」「世界時計」「鉄扉」がこの地における長い歴史の継承を表現している」(<https://nikkenren.com/kenchiku/bcs/detail.html?ci=1015>) とあるのですが、烈士之碑は世界時計の影に隠れて、エントランス正面からは見えません。現在の大坂大学関係者の WEB サイトに見られる烈士の写真は、石碑の正面のものだけで、その由来を記した裏面の碑文を判読できるものが見当たりません。明らかに、見せたくない歴史を人々の目から遠ざけているのです。江戸時代の知の拠点、懐徳堂の流れを汲むと謳う大阪大学ですが、懐徳堂の天才町人学者富永仲基が厳しく批判した日本人の何でも隠したがる体質から全く抜けきれていないのです。

烈士之碑が示すものは、忘れ去られてもよい過去のことではありません。

2023年現在、自衛隊はモンゴルでの道路構築教官育成及び道路測量に係る技術指導任務に関わる事業を展開しています。そして、こうした事業のために、モンゴル語のできる人材を公募しました。最初は、後述する安倍首長のモンゴル訪問や、特定秘密保護法が通った後、2014年頃くらいだったかと記憶しています。

結局は応募を見送った人から、その理由として、「採用に際して求められる友人・知人リストに挙げた人々が知らないうちに、個人情報をチェックされることへの不安があった」と聞いたことがあります。日本政府は、2024年2月27日、民間人を含め経済安全保障上の重要情報を扱う人の身辺を国が事前に調べる「セキュリティークリアランス(適性評価)制度」を導入する法案を閣議決定し、国会に提出しました。『VIVANT』が映像化して見せた通り、民間人の個人情報も合法的に丸裸状態となります。

情報活動の担い手は、ショーン・コネリーの007や堺雅人の別班員のようなものだとは限りません。Kさんの言うように、CIA の仕事の多くは、現地で働いている様々な機関の人たちが提供する情報に基づいていると言われています。現代の日本の場合も、例えば、JICA のメンバーとして純粋な志によって途上国のために働いている人たちが現地で集めた情報が、本人の意図しない目的で使われることもあります。

情報活動のそうした側面は、一般市民がスパイとして利用されるだけでなく、まったく無関係な人間がスパイ扱いされる事態を引き起こしてきました。

満洲事変、満洲建国からノモンハン戦争という流れの中で、モンゴル人民共和国の多くの人々、とりわけ、インテリゲンチャが日本のスパイという容疑で逮捕されたのです。その時期は、モンゴル現代文学の黎明期にあたりますが、モンゴル現代文学の立役者たちも、日本の水道施設について褒めたといった些細な理由で、スパイ容疑で投獄されたのです。拷問を受けた人、命を落とした人、命を失わないまでも、社会的に抹殺された人もいます。内モンゴルでも多くの犠牲者がいました。日本の教育システムの中で、モンゴル文化の担い手となった人たちが、戦後、日本の協力者やスパイの嫌疑で中華民国、中華人民共和国の敵と見なされるようなことも起きました。

モンゴル人民共和国と日本の国交が樹立された1972年以降、冷戦終結を迎えるまでの間は、日本人は警戒すべき監視対象でした。80年代の初め、ウランバートルの街を一人で歩いていて不安を感じ

ることは全くありませんでしたが、目つきの鋭い人がずっとあとをつけてくるのが分かりました。友人がホテルの部屋まで来ることは稀でしたが、部屋まで入れる人も、会話に入る前、ラジオの音を最大音量にして盗聴への対応をすることがありました。ベルリンの壁が崩れる2年ほど前には、ネグデルの牧畜調査中の日本人研究者（自他共に認める英語苦手タイプ）が英國のスパイであるかの如き記事が新聞に掲載されたりするようなこともありました。

スパイであろうと、なかろうと、現地の人々の利益のために行動しつつ、自国の利権を最大化しようとする行為がもたらす大きな悲劇、とりわけ、共感なき親近感にもとづく、上から目線の国際協力がもたらすものについて、最後の、そして最も重大なお題である、COP28についてお話しすることにしましょう。

3 COP28 国益と共通善

2023年11月30日から12月13日年にかけてCOP28（国連気候変動枠組み条約を結んだ締約国会議の28回目）が、UAEのドバイで、開催されました。

開会に先立つ10月4日、ローマ教皇フランシスコは、緊急の『使徒的勧告』を出し、以下のように期待を表明しました。

会議の参加者たちには、特定の国や企業の短期的な利害よりも、共通善と子どもたちの将来とを考慮できる戦略家であっていただきたく思います。政治の恥でなく、政治の高貴さを証明していただきたいのです。力ある人々に対し、あえてかの質問を繰り返します。「緊急かつ必要な際に介入できなかったと記憶に残るような権力に、なぜ今しがみつきたいのでしょうか。」¹³⁾

教皇は、その文書に『ラウダーテ・デウム』（神を賛美せよ）というタイトルを選んだ理由を「人間が神に取って代わろうとすれば、人間自身にとっての最悪の敵となるから」と説明しています。

教皇として誰も使ったことのない、エコロジーの守護聖人、アシジの聖フランシスコ（1182-1226）の名を選んだ教皇は、2015年に、教会史上初めて、環境問題を正面から取り上げた『回勅 ラウダーテ・シ』を発出し、向かうべきゴールとして以下の7つのことを世界の人々に求めました。

1 地球の叫びへの応答、2 貧しい人々の叫びへの応答、3 エコロジカルな経済、4 サスティナブルなライフスタイルの採用、5 エコロジカルな教育、6 エコロジカルな靈性、7 コミュニティーのレギリエンスとエンパワーメント¹⁴⁾。

回勅から8年を経て、世界の状況はほとんど改善されず、むしろすべてが後退しているように見えました。教皇は業を煮やし、緊急の勧告を出して、COP28への強い期待を表明したのです。

しかし、残念ながら、COP28が教皇の期待に応えることはありませんでした。むしろ、彼の思いと反対のことが起こりました。なんと、COP28の決定文書の中に、原子力利用が明記されたので

13) 教皇フランシスコ（著）、瀬本正之（翻訳）『使徒的勧告 ラウダーテ・デウム——気候危機について』（カトリック中央協議会 2023年）42頁。

14) この回勅は以下のサイトから日本語訳全文を読むことができる。https://www.vatican.va/content/francesco/ja/encyclicals/documents/papa-francesco_20150524_enciclica-laudato-si.html

そのアクションプランと7ゴールについては、以下の英文サイトが分かりやすい。
<https://laudatosi.actionplatform.org/laudato-si-goals/>

す¹⁵⁾。COPの合意文書において、原子力が気候変動に対する解決策の一つとして正式に明記されたのは今回が初めてです。

COP28会期中の12月2日、日本をはじめとする米英仏加など22か国が、「パリ協定」で示された目標の達成に向け、世界の原子力発電設備容量を3倍に増加させるという宣言文書に署名しました。

署名国は、日本のほか、アラブ首長国連邦、ウクライナ、英国、オランダ、ガーナ、カナダ、韓国、スウェーデン、スロバキア、スロベニア、チェコ、ハンガリー、フィンランド、フランス、ブルガリア、米国、ポーランド、モルドバ、モロッコ、ルーマニア、そして、モンゴルです。

宣言は、最高水準の安全性、持続可能性、セキュリティおよび核拡散抵抗性を保持しつつ、責任を持って原子力発電所を運転すること、長期にわたって責任を持って使用済み燃料を管理すること、新しい資金調達メカニズムなどを通じ、原子力発電への投資を奨励すること、原子力発電所が安全に稼働するために、燃料分野を含む強靭なサプライチェーンを構築すること、技術面で実行可能かつ経済性がある場合には、原子力発電所の運転期間を適切に延長させること。原子力導入を検討する国々を支援すること等、さらに2050年までに世界の原子力発電設備容量を、2020年比で3倍とする目標を掲げるだけでなく、小型モジュール炉(SMR)や先進炉の導入拡大も謳っています。

12月6日には、ロシアも、モンゴルのSMR計画に言及しました。ロスアトムは、2028年に試運転が予定されているヤクトーの小型モジュール型原子炉プロジェクトを強調するとともに、世界中で設計段階の小型モジュール炉プロジェクトが70件以上あり、6月にロスアトムとモンゴルの企業ダヤン・ディアク・エナジー社は、モンゴルのエネルギー自立を確保することを目的として、原子力、風力、水力発電の分野におけるプロジェクトの共同実施に関する戦略的協力に関する協定に署名したことを見ています¹⁶⁾。

これらの方向性は、2021年あたりから、国際エネルギー機関(IEA)等で既に決定済で、2023年には動きが活発化し、世間にも見えるようになりました。

5月には、フランスのマクロン大統領がモンゴルを訪問し、資源国モンゴルからの重要金属の供給を通じてエネルギー主権強化のために協力することを決定して、気候変動の影響軽減への貢献を約束し、モンゴルでウラン鉱山を開発しているフランスのオラノ社とのパートナーシップの重要性を強調しました。10月、モンゴル側ではフランスへの30年間のウラン供給プロジェクトが報告されています。

同年6月、読売新聞は「モンゴルと急接近する米韓、重要鉱物の「脱中国依存」…地政学的な重要性高まる」と題する記事を掲載して、米国は重要鉱物を巡る3か国での連携をテコに、中露を見据えたモンゴルへの影響力拡大を図る考えだと伝え、米国・モンゴル・韓国重要鉱物協議は、世界の重要鉱物需要に応える上でのモンゴルの重要性を強調するとともに、課題や機会、連携や情報交換、共同事業の実施について議論を交わし、今後、各国の専門家が議論のフォローアップを行う予定だと伝えて

15) 教皇フランシスコは、2019年11月、原発はひとたび事故となれば重大な被害を引き起こすとして「完全に安全が保証されるまでは利用すべきではない」と明言している。

これは、東京からローマに戻る特別機の中での記者会見での発言で、原発事故に関し、東京電力福島第1や1986年の Chernobyl を例に挙げながら、いつでも起こり得ると指摘し、「甚大な災害が発生しない保証はない」ことを強調した。核兵器の使用だけでなく保有についても「倫理に反する」と改めて非難し、世界で核保有が続ければ偶発的な事故や政治指導者の愚行により人類が滅びかねないことへの警鐘を鳴らした。(日本経済新聞 2019年11月27日等を参照。)

16) ロシアの動きについては以下のサイト等を参照。

<https://www.world-nuclear-news.org/Articles/SMR-concept-project-presented-to-Mongolia-by-Rosatom#:~:text=Mongolia%20has%20substantial%20known%20uranium,sites%20have%20been%20under%20consideration>

います。

これら各国の動きに連動して、日本では、2023年2月「グリーントランスマーケット実現に向けた基本方針」において、国際連携を通じた研究開発推進、強靭なサプライチェーン構築、原子力安全・核セキュリティ確保にも取り組むことが閣議決定されました。

そして、2023年9月には、岸田総理がニューヨークでモンゴルのフレルスフ大統領と会談し、福島第一原発の処理水放出について説明、モンゴル大統領は日本の立場への支持を表明したのです。

NHKのニュースは、この会談の折、両首脳がモンゴルをロケ地としたTVドラマ番組などを通じて、両国民の相互理解が深まり、観光交流が活発になることに期待を示したと報じました。

TBSのニュースではなく、NHKですよ。このドラマとは、勿論、『VIVANT』のことです。なんと、日本の総理大臣が、公式に存在していないはずの自衛隊の海外情報機関が国外で活躍する話をもちあげたのです。

なるほど、これで疑問が解けましたね。

バルカ国首都のはずの場所の風景が、ほとんど加工されず、ウランバートルそのものだったり、地理的に離れたモンゴル名所が絵葉書セットのように、すぐ隣あっているように出てきたりするのは、『VIVANT』の聖地巡礼ツアー用の仕掛けだったという訳です¹⁷⁾。

そして、「日本の公安なら世界の諜報機関の中で最も公正な判断をしてくれます。」¹⁸⁾という主人公の唐突な台詞が登場する理由も見えてきます。自衛隊情報部別班員の主人公が、自分の属した組織に裏切られ見捨てられ、組織を恨んでいる元公安部外事課スパイの父親に向かって言う台詞としては間の抜けたものですが、「表の組織、元大日本帝国内務省の特高警察である公安部はちゃんと政府の管理下にあり、公式に存在を認めていないからシビリアンコントロールの利かない別班も、確かに存在していて、裏の組織の彼らも国家利益を守るために、非合法な手段も厭わず、懸命に働いています。そして、両者は互にチェックしあいながら、補完的に機能して、核問題等の国益を守っていますよ」と国民に広報しているわけです。

『VIVANT』で公安部外事課員が語る「日本政府の上に立つ人間は、バカなふりをして意外としっかりやってたりするんだ」¹⁹⁾という台詞は、まさに、国益をめぐるこのドラマが、意図的に「《バカなふり》をしている政府のめざす国益」に沿って作られていることをアピールしているわけです。

それを端的に示す場面があります。

バルカの内乱とノゴーン・ベキの関わりが公安部外事課の指令室で説明される場面です。オリエンタリズムについて話した宗教対立の説明の後、彼が危険をおして、現地に留まらなければならなかつた日本の国益についての説明があります。

それは、バルカ国の地下埋蔵資源だというのです。では、バルカ国の地下埋蔵資源とはなにか？スクリーンに映し出される主な資源は4つ、「銅精鉱 石炭 フローライト コバルト」です。

さあ、このうちのどれが目的でしょう。勿論、フローライト、つまり螢石です。スマホからAIま

17) 株式会社日本旅行は、TBSの協力のもと、「VIVANT」の撮影が行われたモンゴルのロケ地を巡るオフィシャルツアーを2024年3月28日に発売。在モンゴル日本大使館として撮影に使われた「ブーダイホテル」と、主人公が宿泊したクーダンイーストホテルとなったケンピンスキーホテルに宿泊、バルカ共和国の首都クーダンの広場として使用されたスフバトル広場、バルカ国際銀行として使用された国立ドラマ劇場等をガイド、モンゴルの俳優との夕食会などがあるという。

18) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年) 266頁、TVも同じ。

19) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 上』(扶桑社文庫 2023年) 183頁、TVも同じ。

でなくてはならない半導体を作るために不可欠な鉱物です。米中の対立の激化、台湾有事ともなれば大事ですから、台湾メーカーの誘致だと、JIC による JSR の買収は民間企業の国有化だと、経済安全保障だとかの話を聞かない日はないくらいですからね。ドラマはこのフローライトをめぐって、虚々実々の展開となり、最終章に突入するわけです。

実際、モンゴルのフローライト鉱脈は枯渇化傾向とも言われているので、未開発のバルカ国へ期待という設定にはアリアリティがあります。しかし、このスライド、どこか変じやないですか？

バルカ国はモンゴル国とカザフスタンとに国境を接している国でしたよね。

カザフスタンの主要資源はなんだっただしよう。

日本の外務省 HP のカザフスタン共和国基礎データを引用します²⁰⁾。

(1) 石油、天然ガスなどのエネルギー資源、鉱物資源に恵まれた資源大国。石油埋蔵量は 300 億バレル(世界の 1.7%)、天然ガス埋蔵量 2.7 兆立方メートル(世界の 1.8%)(2019 年:BP 統計)。また、レアメタルを含め非鉄金属も多種豊富である(ウランの生産量は世界 1 位(2017 年:通商白書)、クロムの埋蔵量は世界 1 位、亜鉛は世界 6 位(2019 年:米地質調査所))。

では、モンゴル国の鉱物資源の記述はどうでしょう。同じく外務省の基礎データです²¹⁾。

主要貿易品目

- 1) 輸出 鉱物資源(石炭、銅精鉱、萤石など)、牧畜產品(カシミア、羊毛、皮革など)
- 2) 輸入 石油燃料、自動車、機械設備類、食料品

とありますが、日本の独立行政法人 JOGMEC の金属資源情報によると、2008 年段階で、モンゴルのウラン埋蔵量については、IAEA の Red Book によると Identified Resources カテゴリーの埋蔵量は 61,950t で世界第 14 位、で、Undiscovered Resources カテゴリーの埋蔵量は 1,390,000t で世界第 1 位と報告されました。

ウラン生産量 1 位のカザフスタン、潜在埋蔵量 1 位のモンゴルに挟まれたバルカ国にウランが出ないという設定、おかしくないですか？

実は、外務省のモンゴルのデータには、「その他」という項目があり、以下のように記されています。

「モンゴルは、中国とロシアに挟まれ、地政学的に重要な位置を占める。同国の民主主義国家としての成長は、我が国の安全保障及び経済的繁栄と深く関連している北東アジア地域の平和と安定に資する。また、同国は石炭、銅、ウラン、レアメタル、レアアース等の豊富な地下資源に恵まれており、我が国への資源やエネルギーの安定的供給確保の観点からも重要。我が国は、世銀との共同議長の下、1991 年 9 月の第 1 回から、1997 年 10 月の第 6 回までモンゴル支援国会合を東京にて開催した他、国際舞台においても積極的にモンゴル支援のイニシアティブを発揮している。2017 年 12 月策定の対モンゴル国別援助方針においては、大目標を持続可能な経済成長の実現と社会の安定的発展とし、3 分野を重点としている((1)健全なマクロ経済の実現に向けたガバナンス強化、(2)環境と調和した均衡ある経済成長の実現、(3)包摂的な社会の実現)。」

20) 引用は、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kazakhstan/data.html#section4> (最終確認 2024 年 3 月 13 日)

21) 引用は、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/data.html#section4> (最終確認 2024 年 3 月 13 日)

「石炭、銅精鉱、螢石など」と「石炭、銅、ウラン、レアメタル」をよく見比べてみて下さい。意図的にモンゴルのウランを目立つ場所から隠そうとしていることがわかります。『VIVANT』のバルカ国の地下埋蔵資源のスライドを見たとき、わたしには、画面の後ろに、消えたある一枚の地図が見えました。

それは、モンアトムジャパンが、モンゴルからのウランを入れて、日本の使用済み核燃料をモンゴルに送るという構想を示した地図です。

2011年5月、東日本大震災から時を経て、なかったはずの福島の原発のメルトダウンが明らかになって間もなく、モンゴルへ核廃棄物処理場を建設するという日米の構想がメディアに出ました。世論の非難を浴びて、日本政府は、構想自体が存在しなかったかの如く、モンアトムジャパンもその地図もWEB上からも消えてしまいました。その後、日本とモンゴルのEPA成立まで、日本政府や企業が国民向けに出す文書の中からモンゴルのウランの文字が消えるのです。

もし、『VIVANT』のバルカの切り札がフローライトではなくウランだったらどうでしょう？

ノゴーン・ベキがバルカ人の窮民援助のために、未知のウラン鉱脈を発見して、ウラン供給に日本に特権的地位を与えるという話だったら、日本のオーディエンスはどう反応したでしょうか？

カザフスタンはウラン輸出とともに、最も甚大な被ばく被害で知られた国です。四国ほどの面積の核実験場で40年間に、450回以上の核実験が繰り返し行われました。かつて世界で行われた核実験の4分の1近くがこの地域に集中していたと言われていた場所です。中華人民共和国内のモンゴル地域でも核実験が多く行われましたが、その詳細は不明です。

モンゴル人もカザフ人の受けた被害を知らないわけではありません。

2023年に日本で劇場公開されたモンゴル映画『セールス・ガールの考現学』(худалдагч охин 2021年)は犬以外の家畜はほとんど登場することのない現代モンゴル国の都会人の生活を描いた作品ですが、主人公の女子学生は親からの勧めで原子力工学を専攻しています。勿論、モンゴル人民共和国時代にも原子物理学系のモンゴル人研究者はそれなりの数いました。それは当然のことでしょう。20世紀、東西冷戦と中ソ対立の時代、モンゴル人民共和国には、ソ連の核ミサイルが配備されていたのです。

2013年3月の安倍首相モンゴル訪問に際して、移動してのデモを禁じられたモンゴルの反核活動家たちは、「核のサムライよ、モンゴルに手を出すな」(NUCLEAR SAMURAIS HANDS OFF MONGOLIA)という英文の横断幕を掲げて沈黙の抗議を示しました。

2007年に、環境のノーベル賞とも言われるゴールドマン賞を受賞した牧民出身の環境活動家ツェー・ムンフバヤルによる、水資源を鉱山乱開発から護る草の根環境運動は、「河川源流、水資源保護地域、及び森林地帯における鉱物資源探査・利用の禁止に関する法律」という長い名前の法律として結実しました。彼は広大な国土を乱開発から救った国民の英雄だったのです。しかし、国連環境計画の期待とは裏腹に、2013年9月16日、この環境保護法の改悪に反対して行動を起こしたムンフバヤルらが逮捕されました。

政府よりのメディアの伝えるところでは、9月16日、ウランバートル中心部、ルイ・ヴィトンなどが入る高層ビル他数ヶ所で爆破予告通り爆発物が発見され、環境保護団体のデモに銃を携帯して参

加していた彼らが逮捕されたというのです。まもなく、モンゴルの環境 NGO のゴロムトは、故郷の自然と暮らし、民族の権利、大衆の利益と輝かしい未来のために命がけでの運動を続けるムンフバヤルら愛国者にテロリストの濡れ衣を着せようとしているとして、強く政権を非難する声明を出しました²²⁾。

翌10月、共同出資会社である三菱商事 CEO 出席の下、フランスのアレヴァ社がモンゴルのウラン鉱山開発に関する合意文書に調印したという事実、そして、その調印式1か月前に、環境活動家「水の英雄」ムンフバヤルがテロ容疑で逮捕されたという事実、どちらも、日本の大手メディアで取り上げられることはませんでした。

『VIVANT』に登場する、日本の公安部外事課の元スパイ、ノゴーン・ベキなる人物は、奥出雲の農業経験をもとに荒れ地を畑にするという事業に取り組み、井戸を掘り、河川を工事し灌漑を進めたと自ら語るのですが、カザフスタンの年間降水量は日本の3分の1程度ですし、モンゴルなら、さらに、その半分くらい、年間平均気温は、ウランバートルでもマイナス0.8℃くらい、最も寒い時期の平均でマイナス20℃くらいになります。自然環境の全く異なる米作中心の奥出雲の農業経験がバルカで通用すると想像できる人はかなりの少数派だと思います。

もし、ベキの言葉にリアリティがあるとすれば、スパイである彼が水の在りかに関する調査を行っていたという点でしょう。どんな開発を行うにせよ、水は不可欠です。(ウランは水脈に沿って存在します。)勿論、乾燥アジアの草原地域で強引な緑化活動をすれば、さらなる砂漠化を引き起こすことは中国の事例が如実に示しています。長期的にみれば、ベキの緑化の「魔法」は消えていく運命でしょう。だからこそ、ベキは埋蔵地下資源の開発が大事だと思ったのかも知れません。

ベキの出した結論は、奇しくも、西北研究所の今西錦司著『草原の自然と生活』(1944年)の結論と同じです。

「そこでかりに地下の埋蔵資源というものを考えてみるのであります。すなわち草原や砂漠の下から、鉄や石炭がたくさん見つかったとする。するとここで蒙古の自然に対する価値標準というものが一変するのではないかというように考えられる。・・中略・・動物や植物の立場といったものを媒介しなくても、これははじめから人間の立場で、人間の意志と技術とで、ことをおしあげてゆけるのである。・・それは純粋な人間的標準にしたがった自然の利用である。」²³⁾

『VIVANT』では、ノゴーン・ベキや主人公である別班員、公安部外事課の人々、すべての日本人が、バルカの弱者救済のためという大義を掲げて、埋蔵地下資源の採掘権で私服を肥やす買弁的なバルカ人政治家を排除して、結局、バルカを日本に最も都合のよい原材料のサプライチェーンの中に組み込もうとしているわけです。

いまも、ウラン採掘現場近くで健康被害や家畜被害を訴える人たちの姿をメディアが世界に発信することは滅多にありませんが、それはそんな人たちが皆無であるということを意味しているわけではありません。

『VIVANT』の元公安のスパイである父親も、現職の自衛隊別班のスパイである息子もモンゴル語を

22) ムンフバヤルらの水資源に関する活動については、<https://www.transrivers.org/documents/rivers-and-mining/the-short-history-of-the-law-with-long-name/> 等を参照。

23) 今西錦司『遊牧論そのほか』(平凡社ライブラリー 1995年) 46頁。

操りながら、モンゴル語を話す人たちなら誰でも知っていることを決して口にすることはないのです。

「遊牧地を掘ってはならない、水を汚してはならない。」

これは、チンギス・ハーンの教えとして語られることが多いのですが、べつにチンギスの独創ではなく、モンゴル誕生のはるか前から、草原ベルト地帯で家畜とともに生きてきた人々に共通の叡智の中核となる掟です。

デヴィッド・グレーバーが遺作『万物の黎明』で例示したように、人類の文明は近代の考える進歩への一定方向に進化するわけではないし、人類の抱く多様な価値と暮らし方には様々なオルタナティブが存在したはずです。モンゴル人は、「遊牧地を掘ってはならない、水を汚してはならない」という掟を護り、土地を私有すること自体を頑なに禁じてきました。極めてデリケートで複雑なニッチである草原は、一度掘り返すともう二度と元には戻らないのです。

「人間が神に取って代わろうとすれば、人間自身にとっての最悪の敵となる」と教皇が語った所以です。

遊牧地、草原や森林やゴビは、柵で囲って主人面するところではありません。そんな風に考える、土地の所有の制度を持たなかったモンゴル人を手本と仰いで、土地バブルに狂った日本人へ向けて、司馬さんは書きました。

「日本国の国土は、国民が拠って立ってきた地面なのである。その地面を投機の対象として物狂いするなどは、経済であるよりも、倫理の課題であるに違いない。ただ、歯噛みするほど口惜しいのは、「日本国地面は、精神の上において、公有という感情の上にたつたものだ」という倫理書が、書物としてこの間、たれによつても書かれなかつたことである。(『風塵抄2』、1996年)

しかし、司馬さんが亡くなつてから数年のうちに、モンゴル国は土地法を制定しました。

現在のモンゴル国は、もはや、牧民の国ではありません。

世界銀行らとグルになり、モンゴル人に、「祖先から引き継いだ土地の採掘権を売り、大地を穴だらけにして、地下水脈を寸断し、河川を汚して、稼いだ金で豊かになれ」と言う「核のサムライ」たちの姿を司馬さんが見たらなんと言つたでしょう。

2023年10月、原発の使用済み核燃料から出る高レベル放射性廃棄物の処分地選びをめぐり、地球科学の専門家有志が「日本に適地はない」とする声明を公表しました。声明には、日本地質学会の会長経験者を含む研究者、教育関係者や地質コンサルタントが含まれています。2024年の正月の能登の震災の折、珠洲市の原発設置計画が中止されていたことに日本人は胸をなでおろしましたよね。しかし、under control のはずの汚染水は洩れつづけていますし、福島第一のデブリは全く取り出せないままであります。その程度の技術レベルで、「最高水準の安全性、持続可能性、セキュリティおよび核拡散抵抗性を保持しつつ、責任を持って原子力発電所を運転すること、長期にわたつて責任を持って使用済み燃料を管理すること。」が本当にできるのでしょうか？

十年前、『モンゴル研究』No.28に書いたように、モンゴルが核燃料のフロントエンドになれば、それは、間違いなく、モンゴルがバックエンドになることを意味します。

小型モジュール炉(SMR)がそんなに便利で安全なものなら、何故、ヤクート人やカザフ人やモンゴル人のところで実験するのでしょうか。核シェルターも完備されているクレムリンやホワイトハウスでまず実験すればよいではありませんか？そうしないなら、「マルタ」を使って人体実験を行つた731

部隊石井機関の倫理感とどこがどう違うと言うのでしょうか？

新渡戸稻造は「Bushido did not require us to make our conscience the slave of any lord or king. (武士道は、われわれの良心を主君の奴隸と為すべきことを要求しなかった)」と明言しています。しかし、『VIVANT』は、国家への忠節と良心への忠実という問題を、矮小化された復讐物語に閉じ込め、経済行動学者の言う「顔のある犠牲者効果」通り、とりあえず、目の前の難病の少女一人を救っただけで満足して終わります。烈士之碑に顕彰された人々が直面した隣人たる現地人の利益と自国の国益との葛藤は放り出されたままです。

そして、「あらゆる環境破壊によるもっとも重大な影響は貧困に苦しむ人々が被り、自然破壊によって取り出される資源の大部分を消費しているのが、その産出国である貧しい国の人々ではなく、経済的に豊かな国の人々なのだ」という不正義は正されていないのです。

2022年12月、共同通信は、「防衛省が人工知能(AI)技術を使い、交流サイト(SNS)で国内世論を誘導する工作の研究に着手したことが9日、複数の政府関係者への取材で分かった。」と報じています。インフルエンサーが、無意識のうちに同省に有利な情報を発信するように仕向け、防衛政策への支持を広げたり、有事で特定国への敵対心を醸成、国民の反戦・厭戦の機運を払拭したりするネット空間でのトレンドづくりが目標だというのです。

当然、『VIVANT』のSNS交流サイトもこの情報戦の舞台なのです。

しかし、健全なメディアリテラシーがあれば、たとえ、モンゴル人へのエンパシーが欠けていても、「全然近い」というシンパシーがあるのなら、夕食時、虐殺のニュースをみて、「あら、可哀そう」といつて食事を続けた元宗主国の人々とは異なる、「共通善と子どもたちの将来とを考慮できる」行動がとれるはずです。

4まとめにかえて

三題嘶というからには、おしまいに、洒落たおちをつけなくてはならないところでしょうが、おちにかえて、三人の方の言葉を引用したいと思います。

まず、教皇フランシスコの『ラウダーテ・デウム』の中から

・・・COVID-19のパンデミックによって、人間のいのちが、ほかの生き物のいのちや自然環境とどれほど密接な関係にあるか明らかにされたことを言い添えておきます。特別なしかたによってではありましたが、世界の一部で起こることは惑星全体に反響を及ぼすということが明確になりました。ですから、飽きられるほど繰り返し申し上げている二つの確信を、今一度述べたいと思います。——「すべてはつながっています。」そして「誰も独りでは救われません。」²⁴⁾

「生涯の経験」の中で触れた、日本人にとってのモンゴルの特別さがお分かりいただけたでしょうか。ここまでお話ししてきた通り、『VIVANT』と烈士之碑とCOP28「すべてはつながっています。」皆さんとも繋がっているのです。

わたしが見てしまったものに触れてしまった皆さんは、それを引き受けて、何かをしなくてはなら

24) 教皇フランシスコ(著),瀬本正之(翻訳)『使徒的勧告 ラウダーテ・デウム——気候危機について』(カトリック中央協議会2023年)18頁。

なくなつたはずです。

何をなすべきか、ヒントとして、先輩からお預かりしたメッセージを引用します。

・・・大阪外国語大学のモンゴル語科が世界のための学問の場であるというふうに、貴兄たちが、そのようにして行って下さい。私どものころは戦争ばかりで、じつにつまらぬ時代でした。私どものころにも優秀な人がいましたが、戦争と戦後の混乱のためにみな中道で変なぐあいになりました。その悔いを後進のひとびとの努力で癒してもらいたく、こんなお返事を書きました。

諸兄によろしく

12月 何日だったかな。夜

いまから、50年前、1974年の12月、司馬遼太郎さんから頂いた手紙の末尾です。

わたしは、司馬さんからモンゴル語科の後輩学生へと贈られた『モンゴル紀行』の読後感として、ハガキに汚い字で、「われわれにとってのモンゴルはロマンティックな存在ではあり得ない」というようなことを書いたのです。当時の司馬さんは、同時に複数の長編小説の連載を抱えていて、多忙を極めていたはずですが、生意気な後輩学生のために執筆用名前入りの原稿用紙4枚にわたる返事を下さいました。

私信ではありますが、当時の大阪外国語大学モンゴル語科の、そして、いまの大阪大学外国語学部のすべての学生に宛てたメッセージだと思っています。(諸兄とあるのは、モンゴル語科に女性の学生もいるという認識が司馬さんになかったためでしょうね。)ですから、わたしの講義を初めて聞く大阪外国語大学、大阪大学外国語学部の学生全員にこの言葉を40年余り伝え続けてきました。大学での講義を終えるいま、モンゴルへ関心を抱くすべての方々へ引き継ぎたいと思います。自分のためや、モンゴル国や日本国の国益のためではなく、世界のための、平和と共に通善につながる学問の場をつくっていって下さい。

最後に引用するのは、わたしの学生時代、当時の碩学たちがまともに取り合おうともしない、モンゴル民衆思想史研究の構想を否定せず、やさしく励ましてくださった磯野富士子さんの言葉です。磯野さんが、まだ20代の頃、自分のモンゴル体験を記録した『冬のモンゴル』の中に書かれた、瑞々しく凛とした研究姿勢の表明です。

人間の小さな力をもって自然と人間性の神秘を探るのには、全部の研究者が力を合わせても遠く及ばないというのに、その一人一人がお互いの小さな力を「学者の偏屈」や独占欲で切り崩し合っていたら、一体なにができるというのだろう。・・・・対象を検討するのと同じ客観的な冷静さをもって、自己の心と行動を批判することに努め、自我を捨てて真理につくことを真剣に願う人たちが、共通の研究目的によって結ばれたなら、それはこの世で作り得る最も美しい人間関係の一つではないだろうか。²⁵⁾

うちつづく戦争やジェノサイドの一刻も早い終結と、かつて詩人O.ダシバルバルが歌ったようにモンゴルの大地がありのままの姿で次の世代へと引き継がれていくことを皆さんと共に祈りながら、母校での拙い講義を終えたいと思います。

25) 磯野富士子著『冬のモンゴル』(中公文庫 1986年) 233頁。初版は北隆館 1949年。

長時間のご清聴ありがとうございました。

付記：本稿は、2024年3月に行った同名の特別講義の講義録を基に、講義の参加者から頂戴した情報等を加えて、同年4月に再構成したものである。

(しばやま ゆたか)